

●高澤良一 第十二句集 暮津

●十月―十二月

藪裾に燃え尽きをりぬ曼珠沙華

夜寒さのがちやがちややらねば締まらぬ戸

うそ寒の厨に水の吸はるゝ音

秋晴をだうかうもなく家に居り

草の上は空に直結雁わたし

芙蓉喰う虫はお主か悪漢わるじゃのう

夜寒さの暖をとるとて白湯を呑む

髯を振るこほろぎ遺愛の箆笥の辺

悪たれは何處にでも居るまんじゅさげ

ポキポキと目で折り往きぬ曼珠沙華

曼珠沙華疾うに御首級あげられて

この路地に建て込む家並今日の月

車輛音カタカタひつじの二番穂に

夏草のまた生えくれば同じこと

蠅虎雨戸に日和がよささうと

赤とんぼ汚るゝ翅に無頓着

夜顔の実のたんと生り何と野暮

「さうはどっこい」身ひねりかわす蜘蛛の糸

女郎蜘蛛網繕ひを怠らず

行先がすつと決まって萩の寺

紹興酒の空壺に萩活けてあり

ぎんなんを踏みつぶしゆく市営バス

ぎんなん臭さ帯びて戻れば蚊に好かれ

席卷といふ語まさしく泡立草

手と脚が弾んでならぬ運動会

運動会びりっけつにも湧く拍手

一等は万歳三唱運動会

二等賞は万歳二回運動会

三等はえいえいおうの運動会

目の前で抜かれてしまふ運動会  
運動会必死になる顔ならぬ顔  
穂絮も我もいづれは消えてなくなる日  
種子揉みて音にして見す枯れ具合  
晩節を種採ることに安んじては  
日と雨のたまもの色づく箒草  
せせり来て吾がズボンまでせせる蝶  
蜆蝶せせる一日始まりぬ  
ぎんなん剥きとつくに鼻が莫迦と云ふ  
吹かれては芙蓉の影の舞ひあがる  
菊鉢を提げ新刊書小脇にす  
日の翳り易きむらさき食用菊  
蜆蝶せせり疲れの無きものか  
大石田大河洋洋露満満  
草風船いつそ昔のまゝがいい  
ゆっくり枯れ草風船の風流は  
もういいかいもういいよとて秋の暮  
一膳で足る餉茗荷の古漬に  
鶏頭のいたくうらぶれ霧雨に  
金木犀台無しにする雨ならめ  
幾つもの風筋通し萩の寺  
出来秋のわが体重を量る湯屋  
風爽やかピザは高原野菜入り  
煙草の香窓より抜けば秋雨が  
略図又出して確かむ蓼の道  
熔岩原のりんどうしゃしゃりこしゃんと咲き  
洋梨の器量も含めし値段なり  
開戦シーンポップコーンの香が流れ  
ホームにて振り払へるは草風  
露寒やるると草に潜むもの  
おそろしく乱れてをりぬ通草の藪

鶏頭のとつとと昏れてしまひけり  
甘藍の苗に寄せやる土ふんだん  
零余子黄葉始まってをり覚圓寺  
そこに在るまゝの冬瓜師と仰ぐ  
冬瓜の面々授々に他ならぬ  
渡り鳥東寺の空に懸りけり  
浦のつく駅名多し渡り鳥  
簡単に見えてだうして松手入  
魚うおにもある唇やや寒覚えけり  
軍手・莫蔭・脚立を用意松手入  
ご近所より少し早い松手入  
松手入ちよくちよく脚立据え直し  
松手入脚立捧げるやうに持ち  
松手入素人の域抜けてをり  
山妻の見守る中の松手入  
松手入新の軍手の昏れてくる  
松手入あとかたづけを待つばかり  
松手入済みし脚立のひやつけり  
清流を下るがごとく菊見かな  
抱えくる五郎八といふ濁酒  
自然薯のハナガサ\*ハナガサそこを掘れといふ|| さく果  
じねんじよの花笠ひらひら駿河晴れ  
じねんじよの好みの土は粘土つち  
じねんじよの髭火で焙り擦り仕度  
匙匙をもてべろべろ柿を始末せし  
冬珊瑚鰐暮らしも板につき岳父  
躰なまらぬ程度にざつと落葉掃く  
物音をたてたくなりぬ敗れ蓮  
くいくいと鴨鳴く蓮の池之端  
バラ銭が笹に鳴り落つ酉の市  
壁際につんつるてんの冬着垂れ

ようそろと鷗添ひ翔ぶ冬の航  
あらぬこと言ひては払ふ牛膝  
文化の日柄の揃はぬ茶碗蒸し  
杉田湯の槽ふねの柚の数半端でなし  
気泡湯にもんどり打ちて冬至柚子  
冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり  
渡り蟹の食べ殻を捨つ十二月  
末枯れの百草を刺す野路の雨  
冬麗の砂山一つ作り去る  
消灯の紐の音霜でも踏むやうに  
毛皮臭き御仁と同車東京まで  
腋の下締めて降り立つ冬鷗  
むかしから肥れぬ質たちよ干潤うるめ目鰯  
寒最中廁で使ふ水の音  
冬が来る睫毛のいっぽんいっぽんに  
ぴんしゃんと背筋を立てゝ水仙花  
水仙は起立国語の授業中  
水仙にばったり倒れ込む波濤  
日本晴れ咳の一つもしたくなり  
新聞でくっさめ一つ困ひけり  
風邪抜けずひとりくよくよしてゐては  
腰だるしさては取り憑く風邪の神  
電気毛布妻に勧めて受け入れられ  
冬の洗面真水を顔に打ちつけて  
隣室でふ一語に冬の響きあり  
大年の空窺へば鳶の居る  
東京湾数え日の日を敷き詰めぬ  
頓挫して御用納の日のクレーン  
数え日の銭湯に四肢伸ばしけり  
行年の湯屋に遊んで高天井  
湯屋を出づ縁のつめたき洗面器

暮の海一光芒を遺しけり  
小晦日買ひ足すものはメモにして  
大三十日昼過ぎたうたう降って来ぬ  
大晦日まだ起きてゐて隣の灯  
簡単に了はらぬ年よ除夜も雪  
大年の雨のこのまゝ上がらぬか  
熱唱に六十余州年忘れ  
年の夜を更かす蜜柑の皮積み上げ  
除夜詣雨にうるほふ地を踏みしめ  
年越蕎麦鯁臭さが顔にくる  
年越蕎麦鯁の小骨もてあます  
年越蕎麦終の数なるこの三人<sup>みたり</sup>  
参道の歴然とあり除夜篝  
除夜篝火の粉の竜を放ちけり  
年の火の楯の芯から爆ぜにけり  
鈴しゃんと太鼓はどんと除夜詣  
鉛筆削りごりごりと冬休  
クリスマスカード日系三世より  
鳴り物入り日蓮さんの寺の除夜  
年の外に追ひ遣らるごと除夜の鐘  
除夜の鐘浅く撞きたる若夫婦  
除夜の鐘撞いていささか誇らしげ  
義父は慶應ボーイにて初期アイスホッケー選手なれば  
ハイカラで明治生まれでセロリ好き  
豊饒の海を海鼠の語りぐさ  
大根下ろし辛しと老いの舌曲る  
煤の日をふぐり突き上ぐ気泡湯に  
冬曙何としたこと尿あやまつ  
冬青空噴水勢ひ取り戻す  
冬至湯にざぶと一物沈めけり  
白息の一条やがて透明に